

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520164

研究課題名(和文)フーゴ・ヴォルフの音楽批評文研究

研究課題名(英文)A study of music criticism by Hugo Wolf

研究代表者

梅林 郁子(UMEBAYASHI, IKUKO)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：10406324

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、ヴォルフが1884年から1887年に『ウィーン・サロン新聞』に執筆した音楽批評文より、音楽に対する彼の評価基準を明確にすることであった。

彼の音楽に対する基準として、作曲者の意図や作品中心の考え方が挙げられる。特に、彼が敬愛した作曲家ヴァーグナーの批評文では、作品自体には無条件な受け入れ姿勢を示したが、演奏や演出には容赦ない批評も行った。また、リート評でも、作品解釈に優れた演奏者に高い評価を下し、やはり作品を第一と考える傾向が見られる。

ヴォルフは、批評文執筆を通じて、この時期に作品や演奏者に対する評価基準を培い、これは以降の彼の音楽活動にも強い影響を及ぼしたのである。

研究成果の概要(英文):The study aims to identify Hugo Wolf's evaluation criteria of music by examining his commentary published in the newspaper Wiener Salonblatt from 1884 to 1887.

Among his evaluation criteria of music is a focus on the composer's intention and on the piece itself. In particular, in his commentary on pieces by Wagner, whom he revered, Wolf unconditionally accepted the pieces themselves but was mercilessly critical towards the performance and production. In addition, in his commentary on lieder, he tended to highly evaluate performers who excelled in interpreting the piece, which suggests that Wolf was inclined to put the piece first.

Wolf developed his evaluation criteria of music pieces and performers through his written critique in this period, which was to have a strong influence on his future music life.

研究分野：音楽学

キーワード：フーゴ・ヴォルフ 音楽批評 ウィーン・サロン新聞 ドイツ・リート

1. 研究開始当初の背景

フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860–1903) は、1884年1月から1887年4月までの『ウィーン・サロン新聞 *Wiener Salonblatt*』に113篇の音楽批評文を執筆した。批評文そのものは、既に1911年にドイツ語版 (R. Batka; H. Werner, 1911, *Hugo Wolfs musikalische Kritiken*, Breitkopf & Härtel) にて出版されていたが、20世紀のヴォルフの批評文研究は、特に反ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833–1897) を扱った観点からの言及が多かった。しかし、2002年に新しい版のドイツ語の批評文 (L. Spitzer, 2002, *Hugo Wolfs Kritiken im Salonblatt*, 2 Bände, Musikwissenschaftlicher Verlag) が出版されて以降、批評文研究の方向は、少しずつ変わり、ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810–1856) やエドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825–1904) などの著した批評文との比較、ヴォルフ自身の創作活動と批評との関連など、より広い観点から批評文が考察されるようになってきた。

本研究開始以前に、筆者も批評文研究を行い、ヴォルフから見て過去の作曲者となるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756–1791) とルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770–1827) の批評文記述を取り上げた。そして、ヴォルフが二人の作曲者やその作品をどのように評価しているかについてを検証した。その結果、二人は同様に大作曲家としての地位を築いていた人物であったにも関わらず、ベートーヴェンについては作曲者の理想像と位置付けると共に、他者にも同様の態度を要求する様を示したが、モーツァルトについては、全ての作品を肯定的に評価するわけではなく、過去の天才の一人といった評価を下したこ

とを明らかにした。

2. 研究の目的

本研究は、ヴォルフが『ウィーン・サロン新聞』に執筆した音楽批評文を検討し、彼の音楽に対する評価基準を明らかにすることを目指した。対象とする批評文としては、ヴォルフと同時代に活動した作曲者の記述、及びヴォルフが1888年以降作曲の中心ジャンルに据えるリートに関する記述を対象とした。また、批評文執筆によって培われた音楽に対する考え方が、その後のヴォルフの作曲や音楽活動に与えた影響についても併せて検討した。

3. 研究の方法

研究は、次の手順で行った。

(1) 既出版資料と自筆稿の比較

既出版の資料 「1. 研究開始当初の背景」の項で述べた二種類のドイツ語版 (Batka; Werner 1911 と Spitzer 2002) と、1978年に出版された英語版 (H. Pleasants, 1978, *The music criticism of Hugo Wolf*, Holmes & Meier) とウィーン市庁舎図書館 Wienbibliothek im Rathaus に保存されている自筆稿の比較照合作業を行い、記述の正確な把握に努めた。

(2) 音楽批評文の記述の分類

批評文中に取り上げられた音楽に関する記述を、作曲者・作品に対する評価、演奏者に対する評価、の項目別に分類した。

(3) 音楽批評文における評価基準の明確化

分類した記述について、同様の記述の有無や強調の度合いなどから、その重要性を考え、ヴォルフの音楽に対する評価基準を明確にした。

(4) 執筆後の音楽活動との関連性の検討

評価基準と、ヴォルフの後の作曲活動や

音楽に関連する行動や態度を検討した。

4. 研究成果

(1) 既出版資料と自筆稿の比較

2013年及び2014年に、自筆稿を所蔵しているウィーン市庁舎図書館に出向き、調査・検討を行った。同図書館では、自筆資料に二種類の番号が付されており、ひとつは自筆稿に赤字で直接手書きされている資料番号(2ケタ+3ケタ=5ケタの数字)で、もうひとつはおそらく図書館がウェブサイトでカタログを作成するにあたって新たに振り直したと考えられるインターネットID番号(3ケタのアルファベット+7ケタの数字)であるが、双方の番号には対応関係がなく(または対応関係が公表されておらず)、資料番号とID番号の繋がり、現段階では自筆稿をひとつずつ見ていくしか方法がない。また、インターネットID番号上は存在するはずであるが実在しない自筆稿、逆に自筆稿は存在するがID番号がない自筆稿もあった。さらにウェブサイトで公表されているカタログカードと自筆稿の含む情報が異なっているなど、かなり煩雑な状況となっている。このような不一致を整理し、まず、実在する(少なくとも筆者が見つけた)自筆稿は、断片も含め全113篇中の50篇あり、1884年は全く見当たらなかったが、1885年8篇、1886年27篇、1887年15篇であった。

さらに、自筆稿と『ウィーン・サロン新聞』に掲載された記事、及び Batka; Werner 1911 との比較は、既に Spitzer 2002 の第2巻でも行われていたが、「ほぼ同じ」(Spitzer 2002 2: 82)や「かなり同じ」(ibid.89)などの不明確な表記も見受けられたため、改めて比較を徹底し、異動の詳細を調査した。尚、『ウィーン・サロン新聞』自体も、マイクロフィルムでウィーン市庁舎図書館に保管されているが、図書館内で

閲覧しなければならず、また調査に必要な性能を持ったマイクロフィルム・リーダーが同図書館には一台しかなかったことから、筆者がウィーンに滞在できた短期間では、十分な調査を行うことが見込めず、今回の比較対象には含めなかった。

(2) 音楽批評文の記述の分類

ヴォルフの批評文では、計230回分のコンサートが扱われ、取り上げられた人物(作曲家・詩人・演奏者など)の数は400人近くに及んでいる。このなかからヴォルフと同時代に活動した音楽家のなかで特に頻繁に記述されている作曲家や演奏者について、その内容を検討すると、作曲家・作品に対する評価、演奏者に対する評価、の二項目への分類が可能であった。またこれらの検討にあたっては必要に応じ、「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、筆者が本研究以前に論じた、ヴォルフから見て過去の作曲家となるモーツァルトとベートーヴェンの批評文の内容との比較考察も行った。

また、特にヴォルフは批評文執筆を終えた翌年の1888年から、集中的なリート作曲活動を行ったため、時代を問わず、リートに関する記述についても考察の対象とした。

(3) 音楽批評文における評価基準の明確化

作曲家・作品に対する評価

ヴォルフと同時代に活動した作曲家のなかで、ヴォルフから非常に肯定的な評価を得た作曲者は、なんといつてもリヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner (1813-1883) とフランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) であろう。同時代とは言え、実際には二人ともヴォルフより50歳近く年上であり、当時既に作曲家として十分な評価がなされていた。またヴォルフは、1875年にはヴァーグナーに会い(ヴォルフが15歳、ヴァーグナーが62歳)そして批評文執筆の

前年 1883 年にはリストに会っており（ヴォルフが 23 歳、リストが 71 歳）いずれも自作のピアノ曲やリートを見せ、作曲上の助言を得ている。助言を得たことと音楽批評における肯定的な評価は必ずしも結びつくものではないが（例えば、ヴォルフは 1879 年頃ブラームスにも作曲に関する助言を得ているが、批評文における肯定的な評価には結びついていない）、少なくともヴァーグナーに関しては、面会時の印象の強さ、また当時鑑賞したヴァーグナーの作品に対する感銘が、音楽批評文の内容に強く影響していると捉えられる。そのため、ヴォルフはヴァーグナー作品の演奏や上演については批評を行っているにも関わらず、作品自体について言及することはない。一方で、リストについては、むしろベートーヴェンからの流れを汲んだ作曲者と捉えており、作品についてもリストの音楽はベートーヴェンと同様に「精神」性を持つだけでなく、独特のロマン主義的「詩情」に満ちたものと評価したのである。

次に、特定の作曲者から離れ、ヴォルフが音楽批評文執筆後に作曲の中心としたリートを見ると、リートの批評では、特定の作曲者の作品に対する評価も行っているが、むしろ、作曲される詩は良質な素材を選択する必要があることや、詩を音楽的に表現するにあたって、特に旋律が重要な鍵を握るといったような、その後のヴォルフの作曲活動に繋がる、ジャンル全体に跨る評価基準が確立されていったのである。

演奏者に対する評価

「作曲者・作品に対する評価」で述べたように、ヴァーグナー作品の批評文では、作品自体に関する言及がない。その一方で、演奏者はもとより舞台監督や楽長に至るまで、実際に音楽を形とする人々に対しては、言葉の表現、音楽的表現、演劇的表現に対する批評が展開された。例えば《ローエングリン

Lohengrin》（1850 初演）の批評文では、言葉でははっきりとした明確な発音と場面に応じた表現が、音楽では登場人物に合った表現をするよう、演奏者たちに対して、非常に繊細で、具体的な改善の提案を含む批評がなされていた。また、《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦 *Tannhäuser und der Sängerkrieg auf Wartburg*》（1845 初演）以下《タンホイザー》と略記）の批評文では、言葉や音楽的な表現に関する記述は少ないが、歌手の持ち声と演劇的表現の関連性について、多くのスペースを割いている。一方で、ヴォルフは特に《タンホイザー》の批評文では音楽的表現は演劇的表現と相まって、ひとつの舞台を作り上げるという考えを強く出し、さらにその総合的な責任は、舞台監督、ひいては楽長にあるとの見解も示すことで、演劇的表現に関しては、ほぼ具体的な批評が見られなかった《ローエングリン》とは批評において違った姿勢も示している。このように、演奏や上演に関する批評は積極的に行われているが、批評内容の配分については、作品によって異なっている。

しかし、どちらの作品評においても、また他の作曲者に対する批評文においても共通して指摘できることは、作曲者や作品が第一と考えるヴォルフの態度の表明である。このような態度は時として、作品を作曲者が望むように解釈できていないとヴォルフが考えた場合、演奏者たちに対する痛烈な非難となって表れた。これはまたリートを中心とした声楽曲の批評文では、演奏者が作曲者の意図を音楽的に明確にするだけでなく、詩や言葉の持つ表現（例えば子音の発音や、文法上強調すべきでない語句の扱いなど）にも心を砕くことを要求しており、演奏者は、音楽と詩が相俟って生まれる声楽作品に従う者であるといったものの見方が形成されたのである。またこのような考え方は、演奏者の持つ声の質、演奏上の技術や表現力などよりも、

作品解釈に優れた演奏者に高い評価を与えるという批評に繋がっている。

(4)音楽批評文執筆後の作曲・音楽活動との関連

最後の音楽批評文執筆の10ヶ月後となる1888年初頭から、ヴォルフは猛烈な勢いでリート作曲を始めた。もちろん、それ以前にもリート作曲はなされていたが、量の上でも(ヴォルフのリートは1875年から1887年までに87曲が作曲されたが、1888年は1年間で93曲が生みだされた)、質的にも、1887年以前とは全く異なった、正に盛期にふさわしい作品が創作されたのである。ヴォルフはコンサートなどで、自作を人前で演奏する機会を得た場合には、ピアノ伴奏を受け持ったため、当然誰かに声楽のパートを依頼しなければならなかった。また、やがて1896年にはオペラ《お代官様》の念願の初演もマンハイムで行われたが、こちらも当然、演奏者を手配しなければならなかった。しかしいずれの場合においてもヴォルフは、演奏者を大事にしているとは思えない態度を頻繁に示しており、これは数々の評伝や先行研究に見られる通りである。このような態度は、ヴォルフの気性の激しさや病気の現れとも解釈されようが、一方で自身が大変大事に扱って作曲した詩や言葉を、演奏者にも重視して欲しいと求めた結果であり、つまりは演奏者の作品解釈に対する要求水準の高さとも捉えられる。

このように、『ウィーン・サロン新聞』における音楽批評文執筆は、リートを中心とした作曲活動の本格化を導き、またヴォルフの音楽や演奏に対する評価基準を形成すると共に、その後の音楽活動に強い影響を与えたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフの音楽批評文における《タンホイザー》」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第66巻、15-31、2015年、査読無。

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフの音楽批評文におけるリスト観」『お茶の水音楽論集』第17号、掲載決定、2015年、査読有。

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフの音楽批評文における《ローエングリン》」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第65巻、87-100、2014年、査読無。

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフのリートに対する考え方 音楽批評文の記述考察」『お茶の水音楽論集』第15号、83-89、2013年、査読有。

〔学会発表〕(計1件)

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフの音楽批評文における《ローエングリン》と《タンホイザー》」平成26年度全九州大学音楽学会、KKR ホテル博多(福岡市・福岡県)、2014年12月12日。

〔その他〕

梅林郁子「フーゴー・ヴォルフの音楽批評文研究」平成24~26年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、2015、全80ページ。

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅林 郁子 (UMEBAYASHI IKUKO)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号: 10406324